

7-8 既存の道路交通センサスを活用して交通量配分する検討手法

(1) 手法の概要と想定される場面

道路交通センサス OD 調査の結果を基に交通量配分を行い、施策実施後の利用者数を推計する手法である。

本検討手法は、次の場合に適用可能な方法である。

- ・ 自動車が卓越している地域において、自動車の交通量配分により検討する場合
- ・ 直近の道路交通センサス以降に交通の大きな変化がなく、道路交通センサスの将来自動車 OD 表をそのまま活用できると判断できる場合

(2) 検討手順

a) 道路交通センサスの将来自動車 OD 表の取得

最新の道路交通センサスより、将来自動車 OD 表を入手する。B ゾーンレベルでは都市計画道路の分析を十分にできない場合には、C ゾーンレベルに分割することが考えられる。ただし、ゾーン分割により精度が低下する恐れがあることに留意しなければならない。(5-(5)②参照)

b) 交通量配分の実施

将来の道路ネットワークを作成し、将来交通量を配分する。ネットワークは交通量配分により評価する路線を網羅するとともに、代替路線など評価レベルに合わせて作成する。配分手法としては、分割配分と利用者均衡配分がある。

四段階推計法の説明は、文献¹³を参考されたい。

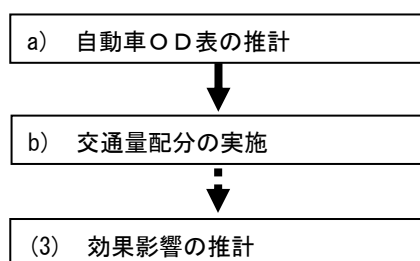


図 7-25 既存の道路交通センサスを活用して交通量配分する検討手法の検討フロー

(3) 効果影響の推計

道路交通量配分を行った結果、推計される区間別交通量を用いて以下の指標を算出する。

- ・ 自動車による拠点等への一定時間以内のアクセス可能圏域・時間
- ・ 自動車交通量
- ・ 道路混雑度
- ・ 走行速度
- ・ 走行台キロ
- ・ 渋滞損失
- ・ CO₂、NO_x 排出量

なお、評価指標の算出方法については 9 を参照されたい。

¹³国土交通省都市・地域整備局都市計画課都市交通調査室監修、財団法人計量計画研究所編著、総合都市交通体系調査の手引き 解説書 2007 年版、pp368~396、2007 年 10 月